

BELLMAN AND TRUE

破滅のプログラム

デズモンド・ラウデン／尾坂 力訳



破滅のプログラム

デズモンド・ラウデン
尾坂 力訳

Hayakawa Novels

BELLMAN AND TRUE

by Desmond Lowden

Copyright © 1975

by Desmond Lowden

First published 1979 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan

by direct arrangement with

Deborah Rogers Ltd.

検 印

廃 止

破滅のプログラム

昭和54年3月31日 初版発行

著 者 デズモンド・ラウデン

訳 者 尾 坂 力

発行者 早 川 清

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京 (254) 1551 (代)

振替 東京・6-47799

印刷所 株式会社享有堂印刷

製本所 株式会社川島製本所

定価 720 円

0097-302730-6942

破滅のプログラム

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1979 Hayakawa Publishing, Inc.

警官の懐中電燈のアイデアをくれた
イーヴァーに、

亀のアイデアをくれた

ニックに、

感謝をこめて本書を捧げる

私は知っている

ジョン・ピールとルビーを

ランターとリングウッド、

ベルマンとトルウを

みつけて調べて、調べて考えて

考えて、そして朝の死

その男と少年は、それぞれスツッケースを持って通りを歩いてた。暗かった。ロンドンには急に十月が来た。そして静かだった。アールズ・コートの数軒のホテルは小さくて悲しげだった。角の一軒には、へホテル・マリーナと書いた冷たい青色のネオン・サインが光り、玄関には、へ空き室ありというカードが出ていた。

男は、ずっと先に立って歩いてた。髪が薄くなりかかった中年男だが、どこか学生らしいところがあった。ハイ街のあたりの服屋で買ったツイードの既製服のせいだ。学校を卒業して初めて就職する時に買うような背広のせいだ。男は、腹と尻に肉がついた今でも、卒業した時と同じ服装をしていた。服には前から気を配ってきた。今も、ズボン

の折り目が乱れないように、スツッケースを用心深く服から離して下げていた。

少年は男の後から歩いた。体は小さく、後頭部はまだ柔らかく丸かった。顔は青白く、とがっていた。十一歳の生意気盛りだ。

二人はそのホテルの前で立ち止まった。ヒラーという名のその男は少年を見おろした。「今度は何という名前にしよう？」と彼はきいた。「ホーキンズでは？ J・ホーキンズ(英国の俳優)では？ 覚えられるかね？」

少年はうなずいた。表情は変わらなかった。

ヒラーは通りの左右を見、特に暗い所に注意した。尾行されているはずはないが、と彼は独り言を言った。昨日連中を撤いたが、それから十二時間接触されていない。

彼は階段を上がって玄関へ入った。ホールの小窓が開いた。鉛筆で書いたような口髭のある細い顔のぞいた。

「ツイン・ベッドの二人用の部屋はあるかね？」とヒラーはきいた。

「二人用の部屋ですか？」ホテルの男は、うさんくさそうに少年を見た。

「息子だ」とヒラー。

「奥さんは一緒じゃないんで？」

「体が悪いんだ。季節はずれだが、休暇でウェスト・カン
トリーへ行ったんだ。家内が、行った方がいいと言うので
ね。そこから帰るところなんだが……」ヒラーは言葉をと
ぎらした。しゃべり過ぎたと思った。

支配人はうなずいて宿泊表を見た。表には鉛筆での記入
があり、紙は、こすれて灰色っぽくなっていた。「五号室
が空いてます。朝食つきで一泊三ポンド半です」と少年を
見ながら言った。その目は悲しげだった。一泊三ポンド半
の二人用の部屋に入る客を見ると、いつも気が滅入るのだ。
三人は階段を上がった。手すりも、踊り場も、ボール紙
で覆われていた。ホテル全体が小さい箱で仕切られている
感じで、薄明かりの中で、非常口の緑の燈が光っていた。

着いた五号室は小さかった。古ぼけた縞のカーペット、
鉛管がむき出しの隅の洗面台。ヒラーはまっすぐ窓へ行っ
た。窓ガラスにつくように立った。前にいた人たちのすえ
たような息の匂いがした。通りの反対側に並んでいる四軒
の家は空き家で、家の中の物は持ち出されて歩道のふちに
積んであり、窓は暗かった。ヒラーは安心した。彼がそこ
にいることは、だれにも見えないはずだ。

「ここがいい」と彼は言った。彼は部屋も、汚れた壁紙も、
大男が座った跡のように座部がへこんでいる椅子も見なか
った。

支配人は不思議そうに彼を見た。「朝食は八時から九時
までの間です。トーストが二枚にコーヒーク紅茶です」

「結構」

「では、おやすみなさい」支配人はベッドわきのテーブル
にキーを置いて出て行った。ヒラーはドアへ行って鍵をか
けた。

「ケチな部屋だね」少年は見まわした。「ほんとにケチ
だ」

「だが間に合うさ」

「トーカーのホテルに比べると、なってないや。あそこは
よかったけどな」

「言っておくが、夜中にコカコーラを届けさせようとベル
を鳴らしてはいかんよ。もうするんじゃない」とヒラー。

「ここにはベルもないよ」

「結構だ」ヒラーは、電燈の下に立って、パウチのタバコ
をパイプに詰めた。技術者らしい白い指がゆっくり動いた。
彼は顔色が青白く、太りすぎていた。生まれてから四十二

年間、日光浴や運動を氣にかけたことがなかった。顔に活氣がなく、毎朝二日酔いに悩まされる彼だが、そのきれいな好き——背広はきちんとハンガーに掛け、毎朝着るワイシャツは洗いたてだ——は、身に備わった習慣だ。口はへ、字形に曲がり、苦しさに耐えているように見えたが、以前は、口もとには内氣さが漂っていた。しばらく前には、何杯か酒をのむとその内氣さが破れ、その下にユーモアがあるのを知人たちは氣がついたものだ。わずか二年の間に、口の両側に深い悩みのしわが刻まれた。そして、今は恐怖のしわだ。

「体を洗ってくる」彼はスーツケースを開け、何枚か重ねたきれいなワイシャツの下タオルを探り当てた。それは瓶を巻いたような形だった。彼は、タオルと化粧道具入れを取り出して浴室へ行った。出て来たとき、薄荷はっかの匂いをさせていた。

少年は彼を見て微笑した。少年も自分のスーツケースを開けていた。薄明るい部屋の中で、高価な玩具が光った——ラジコンのレース・カー、スピードボート、消防自動車。全部で二十四ポンドした物だ。少年はレース・カーを明かりにかざして見た。かすり傷一つなかった。

「おもちゃを大事にしてるんだね」

「そうとも」少年はうなずいた。「大事にしなくちゃ」

「おなか空いたかい？」ヒラーは、少年の小さい頭の黒い髪を見おろした。浴室から出てきてから、彼の口調は優しくなっていた。

「別に。何があるの？」

「自分で買物をしたじゃないか」

「あ、そうだ」少年はレース・カーを置き、買物袋を引き寄せた。ケロッグのヴァリエティ・バック、エクレア二個、ライ・ブレッドを一本取り出した。あとは缶詰め類だ——ブルカーノの煮豆、オールド・サウスの瓜のピクルズ、フルーツ・カクテル、レイデイス・フィンガー（小さいジ・ケ）、コールマンのOKフルーティ・ソース。二人はデリカテッセンを何軒か回ったのだ。

ヒラーは、少年と一緒に買った二枚のほうちう引きの皿を出した。少年は缶切りを出した。「食べる？」少年はレイデイス・フィンガーの缶を開け、バカにしたように鼻を鳴らした。

「今是要らん」ヒラーはカーテンのすき間から通りをのぞいて見た。後ろを向き、また巻いたタオルを取り上げた。

「浴室で水を飲んでくる」

「水ならここにあるよ」

「飲み水じゃない。飲み水は浴室にあるんだ」

少年は肩をすくめた。「行かなくてもいいのに。分かっているんだらう？」

一瞬ヒラーの顔が不安そうになった。それから出て行った。戻ってくると、彼の息づかいは前より楽になり、薄荷の匂いが強かった。少年は開けた缶に取り巻かれていた。

「夕食にどう？」

「うまそうだね」

ヒラーはスツケースから品物を出しはじめた。衣装だんすの引出しに、ワイシャツを丁寧に重ねて入れた。それから、少しの間扉の陰に隠れて、タオルに包んだ瓶から酒を飲んだ。

彼が振り向くと、少年は、ピクニックのような缶詰めだらけの所から、ベッドの方へ行くとこらだった。「靴を履いたままベッドに寝ころんでもいい？」と少年。

「いいだろう」

少年はシーツを引きはがし、服を着たままベッドに乗り、体を動かしてベッドの調子を調べた。それから、ヒラーを

見ながらポケットから十本入りの「ゴールド・リーフ」の箱を取り出した。「タバコのもでもいい？」

「いいよ」ヒラーは窓ぎわに腰をおろした。再びカーテンを細目にあけて通りを見おろした。

少年は腹ばいになり、好きでもないタバコをふかし、分りもしない戦争漫画のページをめくった。汚れた拳骨に顎を寄せ、頭を少しも動かさなかった。ヒラーは待った。つぎに何が起こるか、彼には分かっていた。

「明日は小遣いは、いくらくれるの？」

「条件次第だ」

「どんな条件？」

「お前が逃げなかったらだ」

少年は寝返りをうち、立ちのぼるタバコの煙を目で追った。タバコを離して持ち、じっと考えた。「明日は二ポンド半じゃどう？　ぼくが逃げなかったら？」

「一ポンド半だ」

「二ポンド」

「いいよ」ヒラーは一瞬心配になった。ポケットには、何回も二ポンドずつ与えるだけの金はなかった。明日のことは考えたくなかった。「もう、ずいぶんたくさん金を持っ

ているはずだね」

「貯金してるんだ」

「何のために？」

「キャビン・クルーザーを買うんだよ」

「あの大きいやつかね？」

「相当大きいね」少年はうなずいた。「長さ三フィートだ」

「おもちゃにしては高すぎる」

「四十八ポンド九十だ。だけどラジコンだよ」少年は、すぐ言葉をつづけた。「左曲がり、右曲がり、前進、後進、

それにサーチライト」

「そうだろうな」

しばらく二人は無言だった。

「なぜ、いつも逃げようとするんだね？」とヒラー。

「分からない」

「お前は休暇がきらいなのか？」

「ああ、休暇のことか。好きさ。ただ……」少年はタバコの灰を落とす場所を捜した。

「カーベットに落とせ」とヒラー。

急にマットレスすれすれのところから、黒っぽい目がヒ

ラーに向けられた。「病氣なんだね、ママは？　そうなんだね？」

ヒラーは、少年の青白い顔を見つめた。顔は細まり、その先端に、鋭い世の中を突き刺すような尖った鼻があった。鼻の頭の皮がむけていた。「病氣だ」と彼は答えた。

そして、二人は、そのことを信じようとした。

その後電燈を消し、カーテンをあけた。ヒラーは、窓ぎわの暗がりに、椅子の下に酒瓶を隠したまま、ひっそり座っていた。

少年は彼を見ていた。少年は夜のその時刻のころのことは、すっかり知っていた。その時刻には、部屋の空気は、タバコの煙と酒の匂いで重苦しくなる。男から、きちんとしたところが消えてなくなる。パイプから灰を落とすとき、手がごちなくなる。禿を隠すために慎重にブラシをかけた髪が乱れて垂れ下がる。「お話をして」と少年は言った。

「お話なんて、何も知らんね」

発音が怪しくなっていた。少年は、そんな時が一番いいことを知っていた。「知ってるくせに」

「仕方がないな」

「さあ」

「カウボーイの話かね？」とヒラーは言ってみた。「歩兵のピスオフ」の話かね？ 後ろから人の腹を撃った歩兵の？」

「別のさ」

「よろしい。では、いつでもウサギの人形のついてるスリッパを履いてる牧師さんの話かね？」

「別のさ」

「じゃ、どんなのだ？」

「知ってるくせに」

ヒラーは後ろにもたれた。濡れた唇の間でパイプがジュージューと音を立てた。「『連続物語、危い橋』だね」しばらくしてから彼は言った。「『渡れっこない』だね」

「それだよ」

「どこまで話したっけ？」

「看板を出してる店だよ。ヘルル・ランド」という店のところだ」と少年。

「ああ、そうだ。ヘルル・ランド」だ」ヒラーはうなずいた。「へ生ビール、一パイント四ペンス、小切手でのお支払い結構」という看板だったね。そして、シューク・ボッ

クスでワグナーの曲だけ、それも《トリスタン》を序曲から全曲を演奏してる店だったね」

少年には分からなかった。「どんな人が出てるの？」

「いつもの連中さ。スーティーアン・ジョージ、マウシー・タンク、アルシード・スロウ・ドラッグ・ババジョーなんかだ」

「それで、お姫様も？」

「そうだよ」ヒラーは溜息をついた。暗がりの中で、ホッという音が聞こえた。「お姫様もだ」

「フランスのタバコを吸うお姫様？ じっとしている時はきれいな？」

「そうだよ」瓶を取り上げるとき、ヒラーの手が震えた。

少年は黙っていた。そのお姫様のことも、すでに知っていた。「ぼくも出るの？」と少年はしばらくして言った。

「そうとも」ヒラーの声にはウィスキーの暖かみがあった。

「わたし達みんなが出るんだ。そして、いろんな遊びをする。そのほかに、税務署員しか食べない犬も出てくる」

「ほかに、ぼく達どんなことするの？」

「時どきは、ハップモビールでドライブに出かける。ドライブ中にこぼさないように、酒を大きなジョッキに入れて。

帰ると、石炭の請求書で火を起こす。いい気持ちだ。わたし達の規約は一つしかない。ローヴァーTCを持っている者は仲間に入れないってことだ」

「ローヴァー何だって？」

「TCだ。ローヴァー・ティニア・クルオーリスだ」

「それ、どういうこと？」

「教えてやろう」ヒラーは急に声を高くした。「ローヴァー・ティニア・クルオーリスを持っている連中は、寝室が四つあるジョージ王朝風まがいの家に住み、セント・バーナード種の犬とも結婚し、その犬どもを「ダーリン」と呼ぶ。それから、電線伝いに窓から入って来て、「チェッ、つまんねえの」などと言う緑色のジャンプ・スーツ姿の汚らしいガキどもを持っている」彼の声には激しい怒りが含まれていた。「さらに連中は、南部諸州の五千ポンド以上の年収のある者全部の二重索引名簿を持っている。だから、ストーク・ポージズ村という名前を挙げれば、すぐマナリングという男の名が引き出せるのだ」

少年は身を乗り出した。訳が分からなかったが、ヒラーの子供っぽい怒りにひきつけられたのだ。「それから？」
「わたし達は、この点で一つの間違いを犯した」とヒラー

は言い続けた。「その男を入れたのだ。彼がローヴァー・ティニア・クルオーリスを持っていることを知らずにね。初めは、彼はそんな男のように思えなかったんだ。お姫様は彼を好きになった。彼は、すべて計算してたんだ。彼はぜいたくなキャメルのコートを持ち、マンガンの値上がりで儲けていた」

「だけど、お姫様は彼を大して好きにならなかったんだろう？」少年は腹を立てた。「彼は全然好きにならなかったんだね」

「そうだよ」ヒラーの声は、嘘をつく時は穏やかだ。

本当は、その男はお姫様が好きになった男達の一人に過ぎなかった。いつも彼女は意外なことをしたものだ。

「そんな男はほうり出しちゃおうよ。石ころなんかと一緒に、ブルドーザーでさ」と少年。

「それがいい」とヒラー。

今は少年は眠っていた。ヒラーは恐怖を忘れまいとしていた。空になった瓶を膝にのせ、窓から外を見た。

いいホテルを選んだものだと思う。通りの向こう側には暗い窓があるだけだ。それから、四軒の空き家を含めた

地所に建築中のホテルの新しい看板が。彼は、ゴートがここまで尾行して来れるはずがないと思った。

しかし、建築中のホテルから少し離れたホテルの一室で、ゴートは監視していたのだ。彼は壁の電話の受話器を持っていた。「入って行ったのは確かにあいつだ。いいか、手伝いが要るようになる。だれかをよこしてくれんか？ 朝になると、あっさり撒かれるかもしれないからな」

2

ヒラーが目を覚ますと、口の中がねっとりし、頭と胃がばらばらになっているような気分だった。それを寄せ集めようと思いつながら、別のベッドを振り向いた。

空だった。

ヒラーは吐息をついた。不愉快な気持ちで起き上がり洗面台へ行った。冷たい水、つぎに湯を頭に向け、それから

髭そりにかかった。洗濯したてのワイシャツを着、前の夜ベッドに入る前に慎重にハンガーにかけておいた背広を着、どんどん薄くなる髪をブラシでなでつけた。そして、少しはさっぱりしたろう、と自分に言いきかせた。

それから少年のスーツケースを見た。玩具は全部入っていた。スピードボートもだ。そうだとすると、池のある遊び場を探す必要はないわけだ。普通の遊び場だけでいい。

彼は階段を降り玄関のホールへ行った。鉛筆で書いたような細い髭の男が、彼のキーを受けとった。「坊ちゃんは三十分ほど前一人で出かけましたよ」

「分かっている」ヒラーは、旅行者用のパンフレット立てを見た。「地図はあるかね？」

「坊ちゃんが一人で出て行ったというのに、地図がお入り用なんですか？」支配人は彼を見つめた。

ヒラーはバス路線図を広げた。それにはロンドンの公園が載っていた。彼はそれをポケットに入れて出ようとした。しかし支配人は、彼の目のふちが赤く、手が震えているのに気がついていて。「お待ちを。昨夜は少し過ぎましたね？」

「何でもない」